

幼児の内面生活の理解

田中熊次郎



するのだといえるが、叙述の便宜上、前者から考えてみよう。

幼児の内面生活を理解するという場合、それは、何らかの手がかりによって、欲求・願望・興味・態度などの方向、判断や思考の過程、情緒や感情の動き、あるいは、特性や性格の特色などを知ろうとすることを意味する。ところで、そういうことは、容易なことではない。わかった、理解したという時、それは実は、すでに誤解や偏見におちいっていることが多いのである。われわれには、人の心の内面を正しく知ることは永遠にできないかと思われる。それゆえ、理解しよう理解しようと、無限の努力を続けることが、最もたいせつな理解の仕方になるといえよう。

このような理解の仕方に、大きく分けて二つある。その一は、

方法的技術的に努力を試みることであり、その二は、一個の人格としてかれを扱う努力である。前者は、非情なつめたい理解であり、後者は、人間的なあたたかい理解である。実際には、この二つの努力が適切にからみ合って、ほんとうの理解に接近しよう

① 自然的行動観察法

幼児たちの場合、自由遊びの時間は、かれらを理解する最もよい機会である。しかし、漠然とした観察では、誤解や偏見におちいりやすい。なるべく、先入観を捨てて、かれらの行動を一定の用紙に記録するがよい。一名につき二〇分位がよからう。幼稚園

では、この方法を、月に一回はくり返す。そうすると、ひとりひとりの子どもの態度や特性が、うきぼりのようにわかつてくる。ある子どもは、つねに攻撃的である。かれは、何か欲求不満をひそめているに違いない。ある子どもは、つねに委縮して退屈的である。かれは、何か恐怖や不安をいだいているのであろう。

しかし、中には、それほど目立たない子どもいる。こういう子どもについては、運動会や遠足などの際に注意して観察するがよい。人間は、危機的場面において、ほんとうの自己をさらけ出す。たとえば、競争・疲労などの場合である。そういう時になると、人をおしのけたり、悪がしこく動いたり、意気地なくなったりする。けんかの場合なども、危機的である。おとなしい子どもが、ある時に、猛然と立ち向かう。根性はしっかりしているといえるかも知れない。

そのほか、食事の際、集団保育の際などでも、観察の機会はある。

それらは、前記の觀察用紙に、いちいち書きこんでおくがよい。ところで、記録は、客観的な事實を重視し、自己流の解釈をおおげさに附加しない方がよいのである。たとえば、「A、涙を流し、エーンと泣く」と記述すればよいところを、「この甘ちゃんは、愛くるしい両の眼に露のような涙を流して、小羊が狼におそれたように、恐怖に満ちた泣き声をあげた。家庭で、母親が過剰に愛撫しているからである」といった記述をしてはいけない。それは主觀や想像の部分が多過ぎるからである。このよう

に、わかる範囲の事實に限定しようとすることから、非情なつめたい理解というのである。事實以外は、推量であり仮定である。たしかな論断はできないとしておく必要がある。

② テスト法

近頃は、幼児向きのいろいろなテスト類ができる。知能検査はいうまでもなく、欲求不満テスト、性格診断検査などかなり公刊されている。幼児用個別知能検査でも、知能の程度がわかるだけでなく、検査を受ける際の態度や動作を注意して観察し記録しておくがよい。型通りの考え方をする子どももあれば、余計なおしゃべりをする子どももある。保育室ではあまり活動しない子どもが、ゆっくり考えて正確に反応するということもある。知能検査を、ていねいに実施することで、ひとりひとりの幼児の性格の側面までわかるといつてもいい過ぎでない。

また、C A Tなどのプロジェクト・テクニックは、習熟しないとはつきりした判定はくだせないけれども、これを活用して、幼児の特性のいくらかはわからう。子どもの願望や不満が、物語りの中に示されるほかに、明るい態度ですらすら話すものもあるし、おじけてぽつぽつと話すものもある。

以上のほか、集団の中の幼児たちの相互的な感情関係を理解するには、ソシオメトリック・テストを行なってみるがよい。それには、まず、組別の写真を準備し、その写真を見ながら「お遊びをするとき、いつしょになりたい人はだれか、そのわけ、お遊び

をするとき、いっしょになりたくない人はだれか、そのわけ」などと、順に聞いてみるのである。そうすると、各児がおたがいに、どのような親和感や反発感をいだき合っているかがわかる。

A児がB児を「しんせつでやさしい」といって選択し、B児もまた「やさしく遊んでくれる」といって選択すると、相互選択という。このような相互選択をいくつも持っている子どもは、人気ものである。これに反して、O児がP児を「すぐおこつてたたく」といって排斥し、P児もまた「いじわるだ」といって排斥するなど、相互排斥といいう。このような相互排斥をいくつも持っている子どもは、嫌われものである。そのほか、だれからも選択されないで孤立している子どもいる。

ところで、かような内面的な相互関係の分析と、前述①の自由遊びの行動観察の結果とは必ずしも一致しない。たとえば、ある子どもは自由遊びでは集団の中でリーダーのように行動しているが、内面的な相互関係では「どなつたりぶつたりする」ということで嫌われているというようなことがある。そこで、かれは、必ずしも信頼されたリーダーでなく、むしろ腕力でみんなを支配しているボス児だということが理解される。これと逆の例もある。ある子どもは、自由遊びでは目立つて先に立たないし勢力があるとは思えない。しかし、内面的な分析では人気ものになっていることがある。とするとかれは、潜在的なリーダーであるといえる。

③ 実験的観察法

条件を統制して、子どもを理解しようとする場合は、実験的観察法といわれる。テスト法は、一種の実験といえるが、なお、計画的に小集団の構成法を変化したり、遊びの種類を変化したりして研究する方法がある。精度度を高めるには、観察室を準備したり、録音機を用意したりする。このような方法をくり返すならば、かなりの成果がえられるであろう。かれの欲求は何によって阻止されているか、かれの興味は何に向かっているか、かれの特性はどうであるか、なお、A児とB児との間にどのような関係があるか、それに、C児が加わるとどうなるか。かれらは、どの程度に協調できるか。

さらに、サイコドラマやソシオドラマの手法を活用することも、実験法として有効である。たとえば、幼児たちに、かわるがわるの父親や母親の役を演技させてみる。そうすれば、かれらが、両親に対してどのように期待し、どのような不満を持っているかが理解されよう。同様にして、教師の役割を演技させて、教師への期待や不満を知りえよう。なお、けんかがどうして起ころるか、どうすれば仲よくなれるのかなどもわかる。ドラマは、半ばは非現実であるから、反復することができるし、ある程度までは危機的場面の状況を再現することができる。

しかし、何れの場合にしても、その精度を高めようとすると、は、ビデオテープにとり、熟練した観察者が数人で討議しながら、研究をすすめるということになろう。

④ 面接法

以上、多少の技術や設備の必要な方法を述べたが、普通の幼稚園では、困難とされることがある。だれでもいつでも行なえる方法は、ひとりひとりの幼児と個別に面接して話し合うということである。この場合、こちらは口数を少なくして聞き役となり、幼児に話しやすい雰囲気を作つてやることがたいせつである。あるいは、粘土を与えたり、描画をさせたり、絵本をみながら話し合うのもよい。また、気の合う二人を組んで、一緒に面接するという方がうまくいく場合もある。

二、人間的理解

方法的技術的理解は、実は、人間的理理解を深めるためである。つめたい理解とあたたかい理解で、何が重要かといえば、だれしも後者と答えるに違いない。極端にいえば、保育の効果をあげるには、後者だけでもよいといえる。しかしながら、ほんとの意味の人間的理理解に進むには、方法的技術的な研究が必要である。人間は、自分が理解されたときには、しみじみとうれしいものである。幼児とても、自分を理解してくれる教師に、信頼を寄せ敬愛の感を抱くに相違ない。

世の中にも、観察をくり返し、テストを試み、家庭の調査まで行なって、資料を山と積み上げながら、それで得意然としている教師が少くない。いかに、計量に苦労し、立派なグラフを描い

たりしてみても、つめたい分析に終つてしまつたのでは、何の価値もないといわなければならない。教師が子どもを觀察しようすれば、同時に、子どもも教師を觀察しようとしているし、教師が子どもをテストしようとすれば、子どもも教師をテストしようとしている。だから、意地の悪い觀察や難解なテストは避けた方がよい。子どもの側の事情にはおかまいなしの觀察やテストは無理解ということになる。

子どもは成長発達の可能性を持つものとして信頼し、かけがえのない人格的存在として尊重しなければならない。それが人間的理理解である。短所が觀察されたとしても、どこかの長所を見落しているかも知れない。あるテストで欠点が見出されても、別のテストで美点が発見されるに違いない。われわれの知りえたものは、子どもの内面生活の一侧面でしかないのである。できるならば、長所や美点をさぐりあてるようにならう。

あらをさがしているような、未熟な点のみを強調するような、そういう觀察やテストはやらない方がよい。子どもの問題をそのまま受容する理解。子どもの判断や思考の過程を、そのまま生かしながら伸ばそうとする理解がほんとうの理解である。こちらの判断や思考の型にはめこもうとすれば、子どもはむしろその曲解に驚くであろう。「わたしの心の中をわかってくれるなら、わたしはあなたのいうことを聞くとしよう」と、子どもたちはいいたいのである。